

渡部昇一著「ドイツ参謀本部 その栄光と終焉」祥伝社新書、祥伝社 2009年8月5日刊を読む

「<sup>クラシック</sup>教訓の宝庫」としてのドイツ参謀本部

1. イギリスの史家アーノルド・トインビー (Arnold J. Toynbee. 1889 ~ 1975) は、若い頃にギリシア・ローマの古代史をみっちりやっておいて何よりよかった、と言う。
2. この古典世界は、その興<sup>こうりゅう</sup>隆と衰<sup>すいぼう</sup>亡のサイクルがはっきりしていて、しかもそのサイクル内の因果関係が比較的明快である。そのため、古典世界の勉強は、歴史的・人生的教訓の宝庫として、ヨーロッパにおいては伝統的に尊重されてきた。西欧の興隆を招来したリーダーたちも、ギリシア・ローマの古典に親しむことによって、自己の人生観・歴史観・世界観などを形成してきたのである。
3. この意味において、ドイツ参謀本部の歴史は一つの「<sup>クラシック</sup>古典」である。それは、そもそもの誕生から、生育、発展、光栄、悲惨、再建、消滅のすべての段階が、比較的短い期間に起こったものであるため、見通しやすく、しかも原因・結果の連鎖<sup>しさがみ</sup>が明快である。ということは、後世の教訓になりやすいということを示唆<sup>しさ</sup>する。歴史は鑑<sup>かがみ</sup>であるという意味で、ドイツ参謀本部は、組織として動く人間の運命を見るための重<sup>ちようぼう</sup>宝な鏡である、と言ってよいであろう。

[ コメント ]

久しぶりに渡部昇一先生の名著「ドイツ参謀本部」を通読。リーダーには参謀が必要なことを痛感。国のリーダーである首相が短い期間でクルクルと替わる日本は、リーダー不在といえる。参謀はリーダーの存在があって活躍できるのだが、リーダー不在では国も滅びる。本書を読み、日本の問題はリーダー不在が根本の原因ではないかと思えてならない。

- 2012年5月11日 林 明夫記 -